

◆伊藤洋二 選 ～高浜虚子の俳句より～

先人も惜みし命二日灸

「二日灸」とは、旧暦二月二日に灸を据えると効能が倍になり、年中無病息災で、厄除けにもなるといわれている。俳句では春三月の季語であるが、一般には旧暦八月二日に据えるものも二日灸という。親を困らせる夜泣き、疳虫の虫封じに「身柱穴」に「おきゅう」を据えて貰ったのは一歳の頃。左右の「脾俞」に「やいと」を据えられたのは三歳の頃。「もぐさ」の箱の琵琶湖の絵柄が懐かしい。もぐさのフワフワが蓬だと知ったのは、何歳の地藏盆の頃だったか。「ご先祖に命守られ春やいと」。

朧とは今日の隅田の月のこと

唱歌「おぼろ月夜」は、高野辰之先生作詞、岡野貞一先生作曲。♪菜の花畠に入日薄れ 見渡す山の端霞深し 春風そよ吹く空を見れば 夕月かかりて匂い淡し 里わの灯影も森の色も 田中の小道を辿る人も 蛙の鳴く音も鐘の音も さながら霞めるおぼろ月夜♪ 「春が来た」然り、「春の小川」然り、「故郷」も然り、美しい言葉とメロディの唱歌をつくってくださった高野、岡野両先生方に感謝あるのみ。

鶯や文字も知らずに歌心

同窓生の呑み助達の合意により、お花見を開くことになった。同時に、自他共に認める「宴会部長」への復職が決定した。早速、参加者達の「カラオケ十八番の楽曲早見表」の作成に取り掛かる。「あじさい情話」「昭和放浪記」「あやめ雨情」「街の燈台」「おんな船頭唄」「かえり船」「二輪草」「霧子のタンゴ」「止まらない Ha～Ha」「俵屋玄蕃(フルバージョン)」「女のグラス」…。「金糸雀(カナリア)よ失念も良し花の宴」。

破れ傘を笑ひさしをり春の雨

打ち捨てられたビニール傘を見て心痛めるのは筆者のみだろうか。「使い捨て」の時代を経て、昨今は、「断捨離」が流行りとか。不要な物を減らすことで生活に調和をもたらそうとする思想らしいが、捨てることには変わらない。「MOT T A I N A I」精神を忘れてはなるまい。「忘れ傘捜して初夏の縄暖簾」。

ほととぎす鳴くや合わせ不合わせ

♪縦の糸はあなた 横の糸は私 逢うべき糸に出逢えることを 人は合わせと呼びます♪ 「糸」という歌が、あの「地上の星」を作詞作曲した、歌手の中島みゆきさんの曲と知った筆者は「幸せ者」なのだ。演歌一筋の小父さんが歌うには難曲なれど、素晴らしい詩に涙するのである。ある句会の懇親会でこの曲を歌った女性は、カラオケ店の開店以来の最高点、九十六点を記録した。「あげひばり舞ふや合わせ幸せと」。

顔かくし行過ぎたりし日傘かな

隣家の工事で五ヶ月間に亘って遮られていた日差しが茶の間に戻ってきた。日差しは強すぎても困るが、無いのも困る。お日様の南中高度を調べてみると、冬至＝三三．〇、夏至＝七九．七、で、四六．七も伸び縮みする。近所付き合いは顔を隠してはできない。入り込み過ぎても疲れるし、無関係でもいられない。何事もほどほどが良し。

老人と子供と多し秋祭

社会学者の大野晃教授が提唱した山村集落の区分で、「六十五歳以上の高齢者が集落人口の半数を超え、冠婚葬祭や田んぼ・生活道路の管理など、社会的な共同生活の維持が困難な状況にある集落」を「限界集落」という。機能を失った集落は消滅に向かうとされるが、平成二十七年の調査では全国七万五千六百六十二集落の内、約二割の一万五千五百六十八集落が該当するとか。冠婚葬祭

は社会的共同生活の根幹で、集落の消滅は「お祭り」が消えることでもある。祭りは、氏神様を祀り豊穰に感謝し、集落の結束を強める重要な儀式でもある。我が愛媛県西条市の「西条まつり」は、「だんじりと神輿と多し秋祭」である。

百年の煤も掃かずに囲炉裏かな

煤（すす）ガラスで太陽が欠けるのを始めて見たのは小学三年生の頃だった。太陽の年齢は約四十六億歳。残りの寿命は五十四億年とか。次に日本で皆既日食が見られるのは二〇三五年。大阪万博の岡本太郎先生の「太陽の塔」の内部は、昨年、四十八年ぶりに蘇えり公開された。「億年の塵も捨てずに冬日かな」。

一日もおろそかならず古暦

高校合唱部の先生の「傘寿を歌う ～声楽を志して六十年～」の会があった。恩師のテノールは健在で、松山善三先生・作詞、佐藤勝先生・作曲の「一本の鉛筆」。♪一本の鉛筆があれば 一枚のザラ紙があれば 人間のいのちと私は書く♪そして、アンコールは、Nコンで先生と仲間と歌った「フニクリ・フニクラ」であった。「一曲もおろそかならず年の暮」。